

タイ國留學生に對する日本語教授法

昭和十八年八月十日

- 一、タイ人の日本語学習態度
- 二、タイ語から来る問題
- 三、タイ人に對する對譯的方法の使用
- 四、タイ人に對する英語使用の問題
- 五、タイ人に對する直接法の場合
- 六、タイ人に對する發音の指導
- 七、タイ人に對する文字の指導
- 八、タイ人に對する話方の指導
- 九、タイ人に對する讀方の指導
- 一〇、タイ人に對する作文の指導
- 一一、タイ人に對する文法の指導
- 一二、タイ人に對する日本語指導上の注意

一、タイ人の日本語學習態度

タイ人には、眞に日本語に苦しんでこれに精通しようといふやうな氣概のある者が至つて少い。元來彼等の學習動機は、概して、實利的で速成的である。日本に興味をもつてゐるとすれば、明治維新以來の躍進は何故かといふことを知りたいとか、所謂「ヤマト・スピリット」を一口で言つて欲しい簡単に示して欲しいといつた程度であつて、眞の日本探究の精神からはじまつてゐるのではない。したがつて、日本語の學習も徹底的であり得ない。教授者はこの點を押へて、日本語教育が上滑りしないやうに注意しなければならぬ。

彼等の氣質として、「おとなしいが覇氣が無い、意志が弱い」といふことは、これまで留學生を取扱つた各方面の人々の氣づいてゐるところである。南國人らしい陽氣さ快活さをもつてはゐるが、態度に非常にむらがり、少し行きづまるとすぐ憂鬱になる。さうして先のことはかり心配する。教授者はこの點を心得て、彼等に絶えず一定の見透を與へ、希望を維持せざるやうにしなければならぬ。大体において、初歩の會話は上達が速いけれども、讀方に入ると、「漢字がむづかしい」とか何とか言ひ

出す。さうして、いつまで、どの位習つたらよいか、それはかり心配する。速成の學習法は無いものかとはかり考へる。彼等のこの氣持を、單に抑壓したり無視したりすること無しに、適當に導いてやらなければならぬ。

新興國タイの國民として、彼等は皆愛國者であり民族主義者である。支那人と同一視されることを嫌ふ。インドネシヤ人や安南人と同一視されることも好まない。タイ國は非常によい國でありタイ人はすぐれた民族だと思つてゐる。教授の際「かういふものがタイにもありますか」と問へば必ず「タイ澤山」と答へる。日本人は一段上から指導するつもりでも、彼等には日本と全然同等であるといふ氣分が濃厚である。教授者はよくこれを心得て、大きな包擁力をもつて彼等をゆるし、徐々に實質的に指導して行くことを考へなければならぬ。

二、タイ語から來る問題

彼等の日本語學習の進まない原因の一つは、タイ語から來る。彼等は

口を開けば、タイ語はもつと簡單である、タイの文字はやさしいといふ。その根本はやはり愛國的な氣持から來るのであらうけれども、三、四十の文字と若干の調子記號との組合せ（近來、以前より一層簡易化された）とて一切用が足りるタイ語である。彼等の自慢は、それが皆「一劃」で書けるといふことである。漢字の二十劃とは大變なちがひである。文字のみならず、語法も非常に簡單、動詞の變化無く、否定や疑問も語序で出来る。大體が支那語と同じく語序と調子とでいろいろな變化が作り出されるのである。さうして漢字の問題が無いのであるから、實際簡便である。もつとも筆者はタイ語をたゞ傍から觀察してゐるので、少しも理會し得ないのであるが、支那語がその分析的構造の故に世界一すぐれた言語だといはれるやうに、その意味で、タイ語もすぐれた言語であるともいへる。無論それは幼稚な言語生活にはちがひないし、語彙などはたしかに少いやうであるが、いづれにしても、さうした簡單な言語生活をもつて生活して來た者が、この日本語の複雑宏大な組織に入つて行くのであるから、大變な骨折りであることを考慮に入れておく必要がある。

日本語學習が少し行きづまると彼等はきまつて、「タイ語はやさしい、日本語はむづかしい」といふことを言つて來る。教授者は、如何なる國民に

もその母語はやさしいことを飲み込ませ、なほ、言語と生活との関係から、生活の複雑化と共に言語も複雑になる所以を納得せしめ、日本語と日本人の生活との関係をも理會せしめなければならぬ。外國人の指導においては、すべてにわたつて彼此比較されるものであるから、教授者は、眞に言語の理想に貫かれた日本語への信念を堅持し、彼等が信頼して日本語を學習するやう、常に、自信ある態度で進まなければならぬ。

三、タイ人に對する對譯的方法の使用

筆者はタイ語を知らないからタイ人に對する對譯的方法の効果について十分に論ずることは出来ないのであるが、對譯法によつて指導された學生の話を聞いたり傍觀したりして氣のついたことを述べる。

ごく初歩の、最初の一ヶ月位は、對譯法を喜ぶ。又、相當進んだ者でも、對譯によつてはつきりとその意味が指摘されることを喜ぶ場合がある。けれども少くとも本邦に留學してゐる者については直接法で何の支障も無かつた。さうして、新興國タイの言語は急激な變遷の途上にあるから、教授者のタイ語が古いタイ語であるといつて却つて侮蔑を示すことをも經驗した。

二、三ヶ月もして日本語が少しづつわかるやうになると、對譯法の先生のタイ語は幼稚で破格で、赤坊の言葉であるとか文法がまちがつてゐるとか批判の目で見るとやうになる。これは支那人に對して支那語を用ひた場合にも、その他かうした場合一般に往々耳にすることである。

無論、直接法にしても、その方法を得なければ「はつきりわかりません」の連續で、學習者に不安と混亂を與へることもあるが、直接法であれば、大體において、方法と順序とを考慮することが多いのに反して、對譯法では、どんなむづかしい言葉でも説明を加へて提示するから順序も方法もいらぬ。したがつて却つて効果のあがらぬことがある。タイ人に對するからといつて特別にタイ語を用ひなければならぬ理由はない。但し、有能なるタイ語理會者が、十分計畫ある對譯法によつて授業を進めるならば、それだけの効果のあがることも筆者の見聞したところである。

四、タイ人に對する英語使用の問題

タイ留學生に對する日本語教育においては、現在までのところ、タイ語よりも英語の使用されることが多かつた。筆者も部分的にこれを利用したこともあつたが、これには利益もあれば弊害もある。

先づ利益の點からいふと、英語で置き換へると納得するといふ對譯法の場
合と同じ利益が一つ。第二にはタイ人の英語は高の知れたものであるから、
こちらの英語が未熟であつても、母國語の場合のやうに、まちがつてゐると
か未熟であるとかいはれないで、却つて、英語を知つてゐるといふことで尊
敬される場合もある。これは、外國語教授において第三國語を使用すること
との利益として一般的に言ひ得ることである。第三には、彼等は英語を「
語學的に」學んでゐる。故に日本語に對しても當然その眼で見えてゐる。
したがつて、英語と比較して教へることは彼等の心理に合致して居り、日本
語を語學的に教授することが出来るわけである。
しかし、このことに關しては利益と同時に弊害も大きい。先づ日本人の
英語尊重に氣づかせ、結局は侮日の端をひらく嫌が無いとはいへない。第
三國語であるから、對譯の時と同じやうな利益といつても、そこには自ら限
界があつて、母國語をもつて説明してやるほどの親切さではない。なほ又、
將來については、彼等は英語を學んでから日本語を學ぶとは限らないし、む
しろ、英語を學ばせてはならないのであるから、英語利用は大東亞戰爭以前
の便宜的形態といふべきであらう。

無論このことは單に初歩の、手ほどきの場合だけで、日本語を一年二年
と學習すれば日本語の方が英語より上手になるから、今度は日本語でもつ
て英語を教へて居たわけである。

五、タイ人に對する直接法の場合

直接法は日本語を日本語をもつて教へるのであるから、相手がタイ人だ
からといつてその根本操作に變りはない。ただ、發音の基本練習を先行
せしめるか直接話方から入るかといふ問題があるが、日本語は發音にそれ
ほどむづかしいところは無し、タイ人の困難するところも少いから、機械
的な發音練習を省き、直ちに話方（會話）から入つて、その間に發音指導
をするので差支へないと思ふ。
話方は、場を押へ、相手の心をとりへて行けば、通じないことを心配す
る必要はない。實物の呈示や、圖示や、身振手眞似の件ふことも勿論であ
る。説明の用語としては（〇〇）を説明の對象、△△を既知として、

- 1. 〇〇ワ、△△ト、オナジデス
- 2. 〇〇ワ、△△ト、ハンタイデス
- 3. タトエバ、△△、△△、△△ワ、〇〇デス

等の形式や用語を早く飲み込ませ、この方法に乗じて行けばよい。

たとへば「暑い」といふ語は、「今日は暑いですねえ」といふやうな場面の指摘によるが、「夏は暑い、冬は暑くない」「火は暑いものです」等の例示によるか等て理會させることが出来る。さうして「暖い」の説明には「少し暑い」とでもいへばよい。「寒い」の説明には「ハンタイデス」を使用することになる。かうした臨機應變の處置で行くことは何もタイ人に限つたことでなく、又、日本語教授に限つたことでなく、廣く語學教授法一般として言ひ得ることであるが、幸ひ、タイ人は話が好きであり、察しもそれほど悪くはないから、かうした方法で不可能だといふところはほとんど無い。

六、タイ人に對する發音の指導

タイ人の困難する發音、よくまちがへる發音は、歐米人や支那人更に半島人のそれと大体同じであつて、結局日本語の特性に基くものが多いと考へる。その上で、タイ人として特にこの音が出来ないといふやうなことも無いではない。その主なるものは、

- (1) 清濁の問題、清濁をとりちがへる、濁音に困難する
- (2) 長短の問題、長音をも短く發音することが多い
- (3) 促音の問題、促音を無視してしまつたり、そこで停止してしまつたりする

である。例を「ハナシコトバ上」にとれば（順序は提出順）

ツクエーゾクエー
 ソーデスーソデス
 ソーデワアリマセン
 マドデスーイマロデス
 セートデスーセトデス
 サトイデスーサトデス
 ワタクシノイワタクチ
 アデデスカイフレデスカ
 スズリガアリマス
 サジモアリマス
 コツプガアリマス
 ツクエノシタニゾクエノチタニ

タツテイマスータイマス

ハシツテイマスーハチテイマス

アケテクダサイーアツケテクダサイ

トオシメテクダサイートオチメテクダサイ

のやうな發音の傾向をもつてゐる。特に目立つのは「シ」を「チ」とする傾向の強いことである。「ダ」と「ラ」、「デ」と「レ」、「ド」と「ロ」等を混同する。

促音の指導にしても長短の指導にしても、一音節の長さといふものに注意を喚起しなければならぬが、タイ人の發音傾向として、終から第二番目の音に力を入れて強く長く發音する。したがつて一種特有の調子が出る。もつともこれは歐米人にも見られることであるが、日本人らしい平板な發音は容易にしないものである。一般にタイ人の日本語發音はすつきりしない。どうもにどるところがある。齒切れもよくない。しかし、さうした完全を求めるのでなかつたら、日本語の發音は大した困難なく學ばれるといつてよいであらう。

七、タイ人に對する文字の指導

片カナは割合に容易である。無論はじめ「發音符號」として使用しても相手は「文字」ととつてしまふことは大陸におけると同様である。假名遣については、音聲言語の指導において發音通り書いてやらなければならぬことは、理の當然である。しかし、少し進んで「讀物」に接することになると、「假名遣」といふこと、書くときと實際の發音との隔りを説明しなければならぬ。その説明はよくわかつて大した混亂はない。平がなの字格のむづかしいことはタイ人に對してはかりでは無いであらう。平がなにおいて字格の容易に出來ない字は、五十音順にいつてみると、

- 「あ」「え」「お」「そ」「な」「ぬ」「ね」「ひ」「ま」「む」「め」
- 「ゆ」「わ」「を」

等である。このうち「ぬ」と「ね」とは字格が作れないばかりでなく相當學習の進んだものでも混同することが多い。

漢字の學習には非常な興味をもつ。學習が少し進めばなるべく多くの漢字を學びたがる。多くの者は「漢字帳」などを作つてその音訓や熟語

などを書きとめてゐる。漢字の構造起原にも非常な興味をもつ。その點、歐米人が漢字をよろこぶのとその接を一にする。筆者はある學級に對して、漢字が出て來るとつとめてその構造起原を説明し、同系の漢字を呈示することを怠らなかつたところ、彼等は非常な興味をもつて學び、成績も相當あがつたことを覚えてゐる。半年で五百字位ならば樂である。勿論、構造の簡單なものが學習に容易であるとか記憶し易いとかいふことは無い。ただ漢字の讀みかへの多いことには非常に當惑するが、それにしても、漢字教授がタイ人に對する日本語教育に於て絶對的障害となるものではない。何分にも漢字の數が多いから、働きの多い所謂「基本漢字」から教へること、基本的な音訓から教へることが必要な注意である。

八、タイ人に對する話方の指導

タイ人は話を好む。特に本邦留學生は實際生活上の必要があるから上達が速い。したがつて留學生に對して會話教授、話方指導に困難するとは餘り無いのであつて、この點現地における場合と聊か趣がちがふのではないかと考へる。日本語を少しも知らずに來朝した彼等が一番先に覺

える話言葉としては、通常、

「ワタクシワ〇〇デス」

「コンニチワ」 「サヨイナラ」

「〇〇セン」 「〇〇エン」 (金錢)

などであるが、二三日経つと、

「ドイモ アリガトイゴザイマス」

「ドイモ スミマセン」

「イイエ ドイイタンマシテ」

などといふやうな挨拶の言葉を覚えて來る。

教室における指導としては、やはり、「文型」の最も基本的なものた

へば「: : クダサイ」 「: : デスカ」等々から漸次廣く及ぼすのでなければ

ならない。なほ文型が餘りに形式的になつて自然の會話から離れない

やうにすることも大切である。

大体タイ人は内氣ではあるが社交的であるから社交上の言葉はすぐ覺え

る。又、相手の心持に對しても割合に敏感であつて、話の通じないとい

ふ心配はほとんど無い。生活に即する會話指導で行けば、かなりまで日

本語の中に引き入れることが出来る。

後になつても、やはり、それが、

日本語學習の基礎をなすものである。

九、タイ人に對する讀方の指導

話をするとかなり出来るタイ人が、文字に即して讀む段になるとさつぱり出来なくなる。彼等は「讀方」といふことに慣れず、殊に、書物を朗々と讀む所謂「朗讀」などは餘りやらないやうである。本を幾度も讀んだり讀ませたりしてゐると、すぐ飽きてしまふ。それよりも、早く説明なり解釋なりに入りたがる。さうして、又、一々の漢字を學びたがる。又、細かい文法的説明を求めぬ。意味を大きく把へて段々と内容を把握して行くとか、幾度も口誦してひひ方を覺えるといふ習慣は無いらしい。さうした方法を勸説しても、相當優秀な學生でもやはり實施しない。したがつて、「讀方」をやりながらほんたうの讀方には少しも立入らないで、單に話方の材料として、語句習得、漢字發見、文法練習、或は發音矯正のための材料として讀んでゐるといつた危険が多い。これは、自ら學ぼうと、母國の讀方教育がそこまで行つて居ないこと等々、いろいろの理由によることと思はれるが、指導者として考へて置かなければならない點である。

指導者の範讀が、特に初歩の者に對しては、ゆつくりと明瞭であることが特に大切である。二三回づつ繰り返して讀んでやる必要もある。これは何もタイ人に對する場合に限つたことではない。

讀方の教材についてみると、餘りに日本的なもの、日本特有の季節とか風景とかに關するものの理會に苦しむのは當然である。しかしタイ人だから雪の教材はわからないとか嫌ひだとかいふことはない。むしろあちらに無いものを好む。日本特有の風俗習慣を記したやうな、日本精神のにじみ出たやうな教材もよろこぶ。傳説、民話には彼此共通する部面もかなりあるやうである。タイ人に對して如何なる教材が適當であるかといふことは、ここでは到底論じつくし得ない大きな問題である。

一〇、タイ人に對する作文の指導

作文の力は個人によつて大きな開きがあるが、概してタイ人は相當に書く。作文の時間といつてもそれほどいやな顔はしない。はじめは讀方の練習應用として、或は試問に對する答案として課し、次第に課題作文なり自由作文なりに行つて行くのであるが、はじめから日本語で考へ日本語で書く習慣が大切である。日本語教育における作文は發表練習としての意

味をもつてゐるのであるから、文の巧拙よりも、日本語で考へてとにかく完全な文を綴るやうにさせればよい。書きながら、「先生、かういふ場合は何といひますか」とか「かういふ漢字を教へてください」とかいふことが多いが、それには、出来るだけ、一他生徒の迷惑にならぬ限り「答へてやらなければならぬ」。書いて来たものについては勿論誤りが多い。特に助詞の使ひ方などはなかなかびつたりとしない。けれどもその誤り方は成程かう考へるものかと教授者の参考になるものが多い。その苦心を買つて、これも丁寧に直して返してやる必要がある。

日本語教育において作文を課することは絶対に必要であり、特にタイ人に對した場合、彼等は表現を好むから、これに乗じて行けば決して困難ではな

一一、タイ人に對する文法の指導

日本文法、殊に助詞の用法、その中でも、「は」と「が」との使ひ分け方、「に」と「で」とのちがひ

などは日本語教育が少し進めば必ず質問されることであり、相當の用意がなければ答へるのに當惑することである。「ゐます」と「あります」との區別、動詞の活用、自動詞と他動詞等々、英語などを學んで來てゐる關係から、特別に問はれることが多い。敬讓の表現の一部は無論タイ語にもあるやうであるが、日本語のいろいろな使ひ分けにはびつくりする。學習者が相當頭の進んだ者であれば、「文法」のために特別の時間を割いて、日本語の筋道だけでも頭の中に入れておいた方が効果がある。特にタイ語から來るものとして、たとへば自分の名前にも「さん」をつけたがるといふやうなこともあるが、これなどは注意すればすぐなほる。タイ語において修飾語が後に位置することから來る困難といふやうなものは別に認められない。

文法指導において力を注がなければならぬのは、何といつても「助詞」であるが、教授者は各語について適切な實例をたくさん用意しておいて必要に應じてこれを示すのでなければならぬ。實例について飲み込ませる以外に、いくら説明や定義を下しても、徒らに困難を増すばかりである。

一二、 タイ人に對する日本語指導上の注意

タイ人には學習法の出來てゐない者が多いから、歐米人に對する私教師的な日本語教授のことを考へてゐたら、全然趣がちがふ。教師の方ですべてきちんきちんと正確にやらないと、少しも成績があがらない。さうかといつて強壓的に行くのも考へものであつて、彼等の氣質や心理を飲み込んで、それに従つて辛抱強く効果を見て行くやうにしなければならぬ。タイ人は又、漢字民族とはちがつて、漢字の學習に非常な負擔を感じてゐる。漢字の数の多いこと、讀みかへのいろいろなこと、動もすれば見透を失ひがちである。絶えざる鼓舞激勵が必要である。彼等は、ごく僅かの文字、語彙、語法の中に、きはめて初歩的な言語生活を送つて來た者であつて、これに日本語といふ一大組織を植ゑつけて行くには相當の困難があることを覺悟しなければならぬ。

彼等は我儘な兩國人であつて、その師に對する態度を見ても、日本流に師なるが故に尊敬するといふのでなく、自分に對してよい師ならば尊敬するといつた支那式な選擇的なのところがある。教へ方が上手か下手か、漢字や文法に詳しいかどうか、偉いのか偉くないのか等々によつて信用をき

め、信用しない先生では餘り勉強しない。しかし信用する先生については勿論一生懸命學ぼうとする。又、彼等は試験といふことを相當重大に考へるからこれも利用することが出来る。

彼等は弟分であり我等は指導者なのであるから、何といつても大きな教育的な愛を以て彼等に臨むことが第一である。他面、常に毅然たる態度を^持て彼等を慣れさせい、乗じさせないことも必要である。一般に人の師としてあるべき態度、更に共榮團建設の指導者としての日本人としてあるべき態度、さういふ態度を以て接して行つたら、如何にむづかしいタイ人でも感化されずにはゐないであらう。

最後に、我々は、日本語教育が日本の教育への單なる準備でなく、實にその第一歩であり、日本語教育によつて日本の教育が開始されてゐるものであることを、いつも、忘れてはならない。